

「歴史学」とは何か

(2010年1月)

column 11

北陸大学教育能力開発センター准教授

小南 浩一

2010年がスタートした。2010年は韓国併合100年であり、大逆事件100年でもある。また、来年は辛亥革命100年にあたる。

雑誌『思想』2010年1月号は「『韓国併合』100年を問う」と題して14本の論文を掲載した。同じく『世界』同年1月号も「韓国併合100年 現代への問い」を特集している。また同誌は昨年から田中伸尚による「大逆事件—100年の道ゆき—」を連載している。1月10日の朝日新聞社説は「韓国併合100年 アジアのための日韓築け」であった。

また、今年には1960年の日米安保改定から50年でもある。普天間基地の移設問題で「揺れる」日米関係をあらためて「議論」する契機でもあり、多くの新聞が社説のみならず特集記事を掲載している。沖縄について言えば、かつての琉球王国が、沖縄県として近代日本国家に編入された1879年のいわゆる「琉球処分」から昨年は130年ということで、日本の近代化と沖縄の関係があらためて議論された。さらに遡れば、昨年は琉球王国が幕藩体制に組み入れられた1609年の島津侵攻から400年でもあり、沖縄のみならず奄美と鹿児島、日本国との関係をめぐってシンポジウムも開催された。

ところで、このように歴史を回顧する意味はどこにあるのか。少し、大げさかも知れないが、私は、近年、日本人の歴史的思考力が衰えているのではないかと感じている。歴史的思考力とは、現在を歴史的射程から「相対化」して未来を「構想」する能力である。ゆえに、こうした歴史の回顧は一種の知的インパクトとなって歴史的思考力を鍛える契機となる。

一国のトップリーダーに要請されるのは10年、50年先を見通す構想力であると言われるが、その構想力は歴史的思考力なしに育むことはできない。古今、トップリーダーの帝王学に「歴史学」が必須とされたのは故なしとしない。そうした視点から見れば、昨今の日本のトップリーダーから「透徹した歴史観」をうかがうことはできない。もちろん、ひとりリーダーだけの責任ではない。我々是我々国民のレベルにふさわしいリーダーしか持ち得ないのだから。

数年前に高校世界史の未履修問題があった。また、選択科目である日本史、特に「近現代史」を学ばない高校生も多い。大学においても、「教養」が今また声高に叫ばれているものの、そのなかで「歴史学」の占める位置は大きくない。

教養とは、例えば戦争に巻き込まれない知性、あるいは現実を相対化し、未来を構想する想像力だとするならば、歴史学こそそうした教養を培う学問であると言えるだろう。その意味で、歴史学は単なるリーダーの帝王学ではない。現在のイメージや状況を変えることの出来る知的想像力を育む学問である。歴史的思考力とは知的想像力でもある。歴史学が知的想像力を喚起する学問であるという意味は、当然と言えば当然だが、一国の歴史は一国のみで成立するのではなく、他国との関係、交流史でもあるということだ。

司馬遼太郎『坂の上の雲』で描かれる日清戦争や日露戦争も朝鮮半島や中国の情勢、ロシアや同盟国であるイギリスの動向とのかかわりが描かれなければ、実相は見えてこない。近代日本史はアジアや欧米との関係史でもある。近代のみではない、古代日本がいかに朝鮮半島と密接な交流があったかは、

近年の歴史学の成果が示すとおりである。

『坂の上の雲』と並んで、NHKがETV特集として昨年から放映しているシリーズ「日本と朝鮮半島2000年」を見れば、律令国家日本国の成立がいかに朝鮮半島情勢と深く関わっていたかが分かる。このように見てくれば、歴史は単に民族や国家が単独で独自に作るだけのものではなく、他の国や民族との関わりもまたその国の重要な歴史であるということが了解される。さらに他の国や民族が自国をどう見ていたのか、どのように理解していたかを認識するのも歴史学の重要な課題である（入江昭）。このように歴史学はすぐれて知的想像力を喚起する学問である。

私は多くの学生が「今この時」を絶対不変と考え、ひたすら「今」に自らをフィットさせ、すぐに結果や成果を期待する傾向が強いように感じている。もちろん、こうした事態は学生のみ責任ではない。すでに述べた高校・大学教育における歴史教育の衰退とも無関係ではない。さらに言えば、こうした歴史教育の衰退は大きくは世界を覆う「市場主義」の影響もあろう。特にこの不況期に、「今この時」に適應する能力がなければ生きていくことは難しい。したがって、大学も今現在に即応した能力や技術を学生に会得させ、彼らを企業の求める「人材」として養成しようとする。

しかし同時に、大学のもうひとつの役割は今現在の状況を「相対化」することで、現状をよりリアルに認識し、そこから今とは違う「別の未来」を構想する知恵と勇気を培う（すなわち教養を身につける）ことにある。そのことは、学生一人ひとりが現在を貫徹する価値から自己を解放し、「自由」に生きる知恵と勇気を得ることでもある。

故網野善彦は、「歴史学とは過去を研究することで、現代人である自分を拘束している見えない権力の働きから自由になるため」の方法、即ち「意識を解放するための方法」でなければならないと言った。こうした歴史学の一端を少しでも学生に体得させ、彼らに、今ある現実に対応できる能力を身に付けさせるだけでなく、現実を相対化し、よりよい未来を創造する構想力を身に付けさせることが大学教育の使命であると考えられる。